

## 平成22年度 評価結果報告書【水産試験場、栽培漁業センター、内水面総合センター】

1 機関名（評価会議名称） 水産試験場、附置機関：栽培漁業センター、内水面総合センター  
（水産研究評価会議）

2 開催日時 平成22年8月31日（火） 13:30～16:30  
（プラザ萬象 多目的ホール）

3 出席者

### 〔委員〕

青海 忠久 （福井県立大学海洋生物資源学部 教授）  
時村 宗春 （独立行政法人水産総合研究センター 日本海区水産研究所 所長）  
高橋 治 （福井県漁業協同組合連合会 会長）  
山本 忠 （福井県海水養魚協会 会長）  
北村 恵子 （女性指導漁業士）  
石原 孝 （福井県農林水産部水産課長：内部委員）

### 〔オブザーバー〕

矢野 由晶 （水産課主任）  
山田 洋雄 （水産課主任）  
畑中 宏之 （水産課主任）  
松宮 由太佳 （水産課主査）  
中沢 元紀 （水産課主事）  
安田 政一 （振興局主任）  
上奥 秀樹 （振興局主任）

### 〔実施主体〕

安達 辰典 （水産試験場長）  
杉本 剛士 （水産試験場海洋研究部長）  
村本 昭市 （附置機関栽培漁業センター所長）  
松崎 雅之 （附置機関内水面総合センター所長）

### 〔説明者〕

#### （研究課題評価）

渥美 正廣 （水産試験場海洋研究部主任研究員）  
松崎 賢 （内水面総合センター主任研究員）  
橋本 寛 （水産試験場海洋研究部研究員）  
杉田 顕浩 （水産試験場海洋研究部主任研究員）  
岩谷 芳自 （栽培漁業センター主任研究員）  
吉村 裕一 （水産試験場海洋研究部主任研究員）

### 〔事務局〕

清水 弘明 （水産試験場企画支援室長）  
杉田 顕浩 （水産試験場主任研究員）  
橋本 寛 （水産試験場研究員）

#### 4 評価範囲

##### (1) 研究課題評価

###### [事前評価課題名]

- 地域漁業管理総合対策事業（水産試験場海洋研究部）  
（刺網におけるヒラメ資源の有効活用に関する研究）
- アユ漁場環境資源調査事業（附置機関 内水面総合センター）

###### [中間評価課題名]

- 底魚類資源量推定手法に関する研究（水産試験場海洋研究部）
- アオリイカの養殖に関する研究（水産試験場海洋研究部）
- トラフグ優良種苗作出に関する研究（附置機関栽培漁業センター）

###### [事後評価課題名]

- バフンウニの資源回復対策の研究（水産試験場海洋研究部）

###### [追跡評価課題名]

該当なし

#### 5 総評概要

##### (1) 研究課題評価

事前評価 2 課題については、全て B 評価で 75 点以上であった。  
中間評価 3 課題については、全て B 評価で 80 点以上であった。  
事後評価 1 課題については、80 点以上であった。

## 6 評価結果

### (1) 研究課題評価

#### ①事前評価

研究課題名	研究期間	研究目的および必要性	総合評価	主な意見
地域漁業管理 総合対策事業 (刺網における ヒラメ資源の 有効活用に関 する研究)  (水産試験場 海洋研究部)	H23 ～26	刺網は、経営体が多く、県内の全域で営まれている漁業で、ヒラメ三枚網は資源管理の面で問題がある。課題を軽減するため、本県でまだ普及していないヒラメ一枚網の実用化をはかるための調査研究を行う。	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・多重刺網の一枚網化は、我が国のみならず隣国（韓国）でも沿岸資源管理の重要な施策であり、そのための課題化は適切である。</li> <li>・一枚網の有効性を実際の漁業現場に適応するための有効な方策を意識しながら研究を進めていただきたい。</li> <li>・刺網の魚は一本釣りの魚に比べ魚価が安いので、品質を高めるためにも一枚網の操業は効果的と思われる。</li> </ul>
アユ漁場環境 資源調査事業  (内水面総合 センター)	H23 ～25	アユ資源は、天然資源と放流種苗で維持されている。天然資源の降下仔魚数と遡上仔魚数の関係は明確でない。生息水域水温や餌料環境等の関係要因を、さらに究明することが必要である。漁場環境の変化により釣果不振漁場が増加したので、釣果回復するための漁場改善手法の技術開発を行う。	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・観光産業としても重要なアユに関する貢献度は高く、課題設定も適切である。</li> <li>・アユの河川における生息環境の悪化原因の把握と、その改善方法に関しては、河川の管理手法との関係が深いと考える。</li> <li>・遡上稚魚と降下仔魚の関係、水温と餌料生物との関係などが早期に解明されると、漁場環境の改善にもいかされ、漁場の拡大も図れる。</li> <li>・福井県としてはアユの漁場も多くアユ漁の回復と消費拡大につながるよう希望します。</li> </ul>

②中間評価

研究課題名	研究期間	研究目的および必要性	総合評価	主な意見
底魚類資源量推定手法に関する研究  (水産試験場 海洋研究部)	H19～23	ズワイガニ・アカガレイは本県において重要な漁獲対象魚種であり、現在多くの法規制・自主規制が行われている。 底魚資源は、いったん資源が減少すると回復には長期間かかる。このため、持続的な資源管理を行うためには、より正確な資源量を把握し漁業者に提供する必要がある。	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・基礎的・意欲的な課題である。</li> <li>・安価なシステムを構築し、精度の高いデータを収集しているのは極めて高い評価を与えることができる。</li> <li>・ズワイガニ・アカガレイは底曳網漁業の重要魚種であり、より精度の高い資源量推定ができれば、今後の資源管理に役立てていくことができる。</li> <li>・ズワイガニやアカガレイは福井県を代表する魚種であり、その資源保護は重大課題であると思う。漁獲量や操業期間の規制を守り資源保護に努める事は最も望ましい。</li> </ul>
アオリイカの養殖に関する研究  (水産試験場 海洋研究部)	H19～23	本県の海面養殖業を取り巻く環境は厳しくなっている。福井県の海面養殖経営の安定化を図るには、多品種養殖への取組みが必要で魚種選定は重要な課題である。 アオリイカは成長も早く、市場価値も高いことから、短期間の飼育で商品化が可能な養殖対象種として期待されている。 アオリイカの早期生産や養殖技術に関する基礎研究を行い、本県の新たな養殖魚種を開発することで養殖業の振興を図る。	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・トラフグ以外の養殖魚種が確立できれば、県の水産業及び観光に大きく貢献することが期待できる。</li> <li>・本県の海産魚類養殖の現状を考えると、地域性が高くしかも有効な養殖対象魚種の開発は急務であるといえるので、必要性は極めて高く、課題は明確である。</li> <li>・アオリイカの短期養殖ができれば、養殖業者の所得の向上にも寄与できる。</li> <li>・イカの消費は全国的に多いが価格も高いアオリイカの養殖には大いに期待している。</li> <li>・</li> </ul>
トラフグ優良種苗作出に関する研究  (栽培漁業 センター)	H19～23	嶺南地域の重要産業であるトラフグ養殖は、近年、中国等其他地域産トラフグとの競合による価格の低迷によって、一層の生産コストの削減を迫られている。そこで、早く大きくなり、病気等に強く、生残の良い、良質な種苗を養殖業者に提供することができれば、生産コストの削減につながり、市場競争力の向上が期待できる。本事業では、トラフグ養殖にとって有利な形質をもつ家系をDNA マーカーによって特定し、優良親魚から優良種苗を安定的に生産するための技術を開発する。	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・育種は長期間の継続と、幅広い品種の探索が鍵になるので、課題名はともかく、研究を継続し、できるだけ多くの品種を探索していただきたい。</li> <li>・経営の安定は急務の問題である。優良種苗を作出することは、大きな助けになる。育種を無視しては成り立たない研究で長期的な視野に立つことが求められる。</li> <li>・優良種苗は、高品質化にもつながり、養殖業者も期待している。</li> </ul>

③事後評価

研究課題名	研究期間	研究目的および必要性	総合評価	主な意見
バフンウニの資源回復対策の研究  (水産試験場 海洋研究部)	H17 ~21	本県においてバフンウニは「越前ウニ」の原料として重要な資源であるが、近年、漁獲量が低迷しており、その原因究明および資源回復が求められている。これまでの調査結果から、資源の減少が夏から秋にかけてみられ細菌が関係している可能性が考えられたことから、細菌の分布、出現時期を調べるとともに、ウニの斃死メカニズムのひとつを示唆した。地蒔き式養殖では、天然小型ウニの越夏対策および人工大型種苗の効果的な放流技術を検討中である。	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・沿岸資源に及ぼす環境の影響の把握は、重要なテーマなので、論文発表に期待したい。</li> <li>・天然資源の急減という現状に関して、その原因究明と対処方法についてかなりの成果を上げることができたと評価する。</li> <li>・今後は、地蒔き式養殖技術の展開で、さらに明らかにしていただきたい。</li> <li>・資源減少要因が明らかになったことは評価に値する。</li> </ul> 高水温期の斃死対策、効果の高い放流技術の確立が期待される。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・県特産品の一つであり、漁業者の所得安定のためにも地蒔き式養殖を広範囲にすすめていただきたい</li> <li>・研究成果が漁協を中心とした事業化の展開が望まれる。</li> </ul>